

ビジュアル・リテラシー教育と 子どもの写真撮影教室

中村こども (なかむら・こども)

こども写真ラボ合同会社代表

小学生の従姉妹がピアノを弾いていた。カメラマンの私はピアノがまったく弾けない。難解な記号を読み、両手で数多くの鍵盤を押さえ、同時にペダルを踏んで、操作している。いったい、誰がはじめに、子どもにピアノができると考え、教え始めたのだろう。これならば、写真も段階的に、継続的に教えることができるのではないか。

——ピアノが「音」なら、写真は「光」だ。写真はピアノと同じように、小さな頃から始めるものに、きつとなる。

そう考えて、自分の子どもと、その友達に写真を教えてみることにしたのが、2011年のことでした。

子どもたちと時間を過ごしていくなかで、たくさんの驚きがありました。最初に想像していたよりも優れた写真を撮影するばかりか、難しいと思われていた「f値、ISO、シャッター速度」などの専門用語をスムーズに楽しみながら覚えたからです。また、何を撮るか、どのくらい撮るかといった、撮影の履歴をみることで、その子の個性を感じることができました。子どもたち自身も、言葉のみで話すよりも、相手に写真を見せながら話すほうが、たくさんの具体的な内容を頭から引き出せるようでした。写真は明らかに、人と人との間の情報伝達率を向上させていたのです。

■視覚伝達社会とビジュアル・リテラシー

社会は、何かと何かの間の情報伝達率を飛躍的に向上させたときに、大きく発



中村こども

こども写真ラボ合同会社代表。本格的な子ども向け写真教育プロジェクト *codograph* (コドグラフ) を 2011 年にスタート (<http://codograph.net/>)。1983 年東京生まれの 2 児の父。写真教育を始める前は、子どもを専門に撮影・執筆するカメラマン。

展してきました。これまでたくさんの発明がありましたが、人間にとっての一番大きな発明は、なんといっても言語でしょう。言語は、人と人との情報伝達ばかりでなく、自己と自己との伝達率も向上させました。写真も、まったく同じことが言えます。写真が、自己-他者ではなく、自己-自己での情報伝達率を上げるという話は、決してアートや感性的なものに限ったことではありません。

たとえば、いまどきの学校では、「リテラシー教育」として言葉の読み書きに大きく時間を割いていますが、画像の読み書きである「ビジュアル・リテラシー教育」には、ほとんど時間が割かれていません。ビジュアル・リテラシー教育は、リテラシー教育とまではいなくても、人や社会の根幹に関わる大きな成長要因になる可能性を、原理的に秘めています。

これだけメディアが発達した社会で、視覚伝達という根幹的な部分が余白として存在していたことに、私は驚きと喜びを感じました。リテラシーの教育が社会的に普及する以前は、現代のようなリテラシー普及による社会の発達が十分予想できなかったように、今後のビジュアル・リテラシーの普及にどの程度の大きさの余白が残されているのかは、私にも妄想することしかできません。しかし、社会そのものは、ビジュアル・リテラシー教育の十分な普及以前に、その余白の可能性を実感させるような現象をさまざま起こしています。象徴されることを一つ挙げるとすれば、昨今インターネット上にアップされる写真の数の大幅な増加です。

近年、写真はフィルムというアナログから、デジタルへと移り変わりましたが、まだその歴史は浅いものです。アナログ時代の写真を用いる主な目的は「記録」と「芸術」でした。しかし、デジタルになった今、写真の主な目的は「伝達」へと変化しました。以前強調されてきた「記録」と「芸術」は、よりニッチになっているといえるでしょう。

言葉だけで伝えるよりも、なんとなく便利だからという直感で、今この瞬間にも写真は大量にネットにアップロードされています。

人々が写真を撮影する姿や、無邪気に悪ふざけの様子をネットにアップロードすることは、時に揶揄の対象となっていますが、私は少し違うことを感じます。学校で教えたわけでもないのに、これだけの人が同じようなことをするとは、よほど人の欲求の根幹に関わっているのだろう、これは面白いと思うわけです。とかく大人は新しいものに対しては、よく理解する以前に先入観で否定してみたり、ついマナーを押し付けたりしがちですが、なぜ人々がそのような行為をしてしまうのか、あるいは、どんな可能性があるのかを大人たちは考え、子どもたちに伝えるべき価値があると私は思います。

■写真のデジタル化が可能にしたこと

アナログからデジタルへの変化は、たとえば、写真テイストの変化といった感性的な話や、あるいは、事実上撮影可能枚数に制限がないというコスト的な話に集約されがちですが、もう少し冷静に分析していくことにしましょう。アナログからデジタルへの変化によって得られたものは主に三つありますが、もっとも劇的だったのは「撮影結果をすぐに見られる」ということです。

アナログのフィルムカメラは撮影後に現像や印画紙プリントが必要でしたから、さながら目の前のピアノを弾いても、2日後にしかその音を聞くことができないような代物でした。デジタルへの変化によって、弾いたらすぐ音が出る楽器のような道具に変わったのです。

以前は写真を表示するカメラ・モニタの画質がそれほどよくなかったために、この変化が我々に与えるインパクトはそれほど大きなものではありませんでした。カメラに搭載されるモニタの画質がよくなってきたのはここ数年のことで、今となっては、誰もがその威力を実感することができます。

「すぐ見る」ことが可能になったことで、あわせて「すぐ比べる」ことも可能になりました。これが二つめの変化です。この「比べる」というのは、人にとってとても重要な行為で、なにかを獲得したり、未知のものを切り拓いたりするためには不可欠と言えます。小学校には「比べる」という授業科目があってもいいとすら思えるほどです。

たとえば、私は子どもたちに写真を教えるときに、「トマトをおいしそうに撮

るためのコツを知っている人はいますか？」と聞くことがあります。子どもたちからはいくつか答えが出てきますが、ある一定のところまで止まってしまいます。そこで、「君たちはトマトをおいしく撮るためのコツをもっとたくさん知っているけれど、うまく引き出せないだけなんだ。これからそれを証明してみせます」と言って、実際にトマトを撮影した写真を何枚か見比べさせます。明るいものと暗いもの、色が鮮やかなものとそうでないもの、トマトがひっくりかえっているもの、背景にトイレが映り込んでいるもの。なに一つ説明しなくても、子どもたちは、どちらがいいか、それがなぜなのかといったことを、自ら認識することができるのです。一度それらを認識することで、他の対象にも応用することができます。

ビジュアル・リテラシー獲得の根本は、おそらく「比べる」ことにあるでしょう。トマトのケースでは、視覚的においしそうか否か、ということが、どんな要因に影響されるのかを解き明かしていくことができます。教える側としては、なにが、それらしさをたらしめているか、子どもたち自身で意識化させていく機会をつくるのが大切です。

三つめの大きな変化は、画像を「すぐ送れる」ようになったことです。これはアナログからデジタルへの変化というよりも、インターネットの話になってくるでしょう。「見る、比べる」の二つは、自己-自己の話でしたが、三つめは自己-他者の話です。インターネット以前は、遠隔地との即時的なコミュニケーションといえば、もっぱら電話に頼ってきたわけです。インターネットのインフラストラクチャが発達したことで、画像や動画といった大きなデータでもやり取りすることができるようになりました。

たとえば、現在でも110番や119番への通報は電話でしかやり取りできませんが、これは非常に効率が悪く、ロスの多い伝達方法のように思えます。近い将来、写真や動画を使って110番や119番とやり取りできる日が来れば、事件解決や救命に大きな効果をもたらすでしょう。スマートフォンで撮影された写真や動画にはGPSの位置情報が付いていますから、小さな子やお年寄り、あるいは、言語コミュニケーションが不得意な外国人でも、より正確に、より素早く助けを呼ぶことができます。それは、ビジュアルの持つ圧倒的情報量が言語・テキストのリテラシー能力との差を埋めるからです。

言語リテラシーでの格差が生じやすいケースとしては、子どもと大人のギャップ、異なる言語のギャップ、専門家と非専門家のギャップが考えられます。先に

示した緊急通報の例で特に着目すべきは、三つめの専門家と非専門家の場合です。通話に頼ったコミュニケーションでは、非専門家である発信者は現場の状況を的確に表現できないことが多いのですが、画像や動画を送ることで、発信者側が気付いていないことを、受信者が情報として受け取ることができます。さまざまな事象を余すことなく言葉に変換して伝達するための教育コストは非常に高いのに対し、同様の事象をわかりやすく撮影して送信するための教育コストは極めて低いことは特筆すべきことです。

■なぜ、子どもに一眼レフを使わせるのか

ここまで、言語リテラシーの面では弱者の子どもたちと写真の相性が良いことと、これからの社会の変化や発展にとってビジュアル・リテラシーが重要な鍵を握っていることを説明してきました。最後に、子どもたちが道具として扱うカメラについて、いくつか述べておきたいと思います。

私は、子どもたちにコンパクトデジカメではなく、一眼レフを使わせています。それも入門機用の軽いタイプのものではなく、中級者向けのやや高価なものにしました。レンズは、ズームのないマクロレンズを選びました。一つひとつの選定にきちんとした考えがあります。一度にたくさん子どもたちに効率よく教えられるよう、この組み合わせを10セット用意しました。

現場でよく質問されることとして、「子どもたちがカメラを壊してしまわないか?」「子どもには重くないのか?」というものがあります。カメラを玩具として手渡せば、遊んで壊してしまうかもしれませんが、ハサミや楽器などの道具として渡すことで、気をつけて扱ってくれるものです。今までのワークショップでは小さな傷がついたことはあっても、機材を壊されたことはありません。「これは大事に扱わないといけなないな」という本物感があるものを渡すことが影響しているように思います。

撮影が「おもしろくない」と感じている時、子どもは「重い」と口にすることがあるのですが、カメラの操作がわかってきておもしろくなってくると、数時間続けて夢中で撮り続けるようです。子どもたちは、普段からカメラより重いものを持ったり、撮影よりも運動量的にハードなことをこなしているのです。なんら不思議なことではないでしょう。

私が機材の選び方や教え方で気にしているのは、子どもとカメラの一体感です。

図1 一眼レフで撮影する子どもたち



出所：筆者撮影

そのため、あえてカメラのオート機能は可能な限りオフにします。それは撮影者の意図に反して勝手なふるまいをしがちだからです。明るさを決める露出も、オートではなくマニュアルで撮影しています。子どもたち自身が撮影した写真を見て、明るいか暗いかちょうどいいかを判断して調整しているのです。

カメラのマニュアルと聞くと、「専門的すぎるのでは？」と感じる人もいるかもしれませんが、私がマニュアルで教えるのは、実はそのほうがずっと簡単だからです。複雑でわかりにくいオート設定よりも、物理法則や知覚に依存したマニュアル設定のほうが、子どもたちが「あれ？ どうしてこうなるの？ わからない」などとつまづきにくいのです。

マクロレンズを選んだのも、同じように、子どもの「わからない」を減らすためです。普通のズームレンズは、被写体に近づくほどピントを合わせにくくなります。ここまではピントが合う、ここからは合わない、ということが音も印もないために知覚しづらいのです。一体感を得るためには、手が届く範囲でピントを合わせられることが大事だと考えました。不思議なことに、マクロレンズで近寄って撮影する写真は、肉眼で見るのと同じ絵なのに、肉眼で見るよりもいろいろなことがよくわかるのです。

カメラに関して、「いまどきタブレットやスマートフォンでもいいのではないか？」と考える方も大勢いらっしゃるでしょう。これらのカメラは日々進化しているので、画質だけを見れば、なんら問題はありません。ただし、両者の大きな違いはデザインにあります。一眼レフは手や体で撮影操作しやすいように作られています。撮影体験をより良質なものにしようと考えられているのです。これに対して、スマートフォンのカメラは、簡単にその場の画像を得ることを目的としています。子どもにとってみれば、良質な撮影体験を通じることで得られる成果のほうが、より大きなものになるでしょう。

今一度社会を見渡してみれば、そこに流通している写真は、大人たちが撮影したものばかりです。それは大人たちの視点のみを必要以上に社会に増幅していることに等しいでしょう。そんななかで、私は子どもたちが撮影した写真がもっと公的に使われる社会のほうが、もっと健全だと思うのです。

それは、たとえば、ブレていたり、ピントが合っていなかったり、目線の高さが低かったりと、子どもたちの技能的、身体的な未熟さがあふれた写真が見たいということとは違います。むしろ、子どもたちが撮りたい、子どもたちが満足する写真を広めたいのです。子どもたちが自ら工夫して撮る機会を作り、たくさんの写真の中から自分がいいと思うほうを選ぶことが大事ではないでしょうか。低い位置から撮りたければ寝転がり、高い位置から撮りたければ椅子に登ればいい。写真撮影の場面以外の学習場面では普通に行われていることが、まだ、写真撮影の学習場面では行われていない。そういうことがたくさんあります。